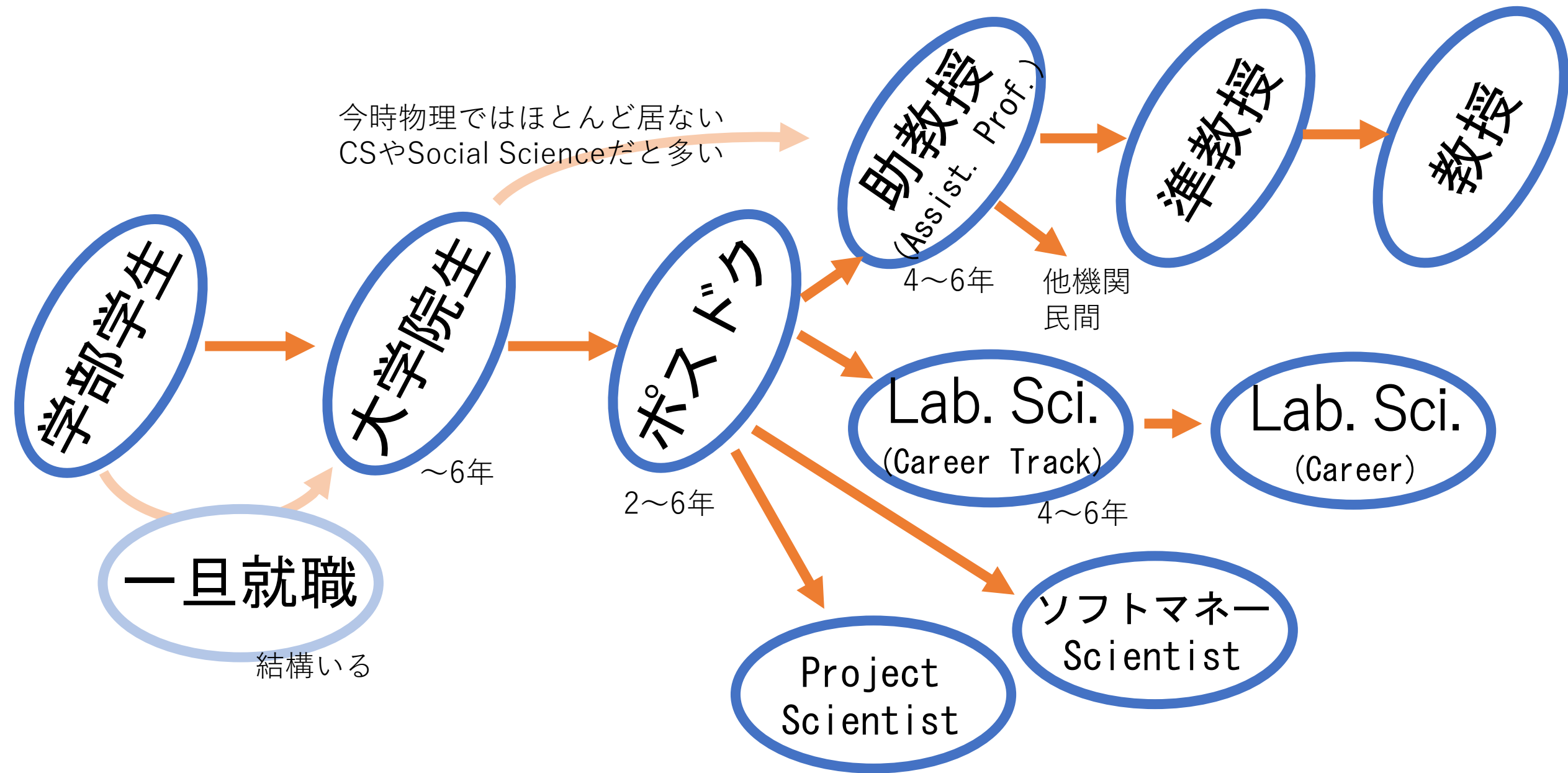


米国でのキャリアパスについて



米国でのキャリアパスについて

- ポスドク

- 3～6年が良いところ？最近ではUnionが5～6年に制限する場合も。
 - 続けるときはProject scientist等に「昇格」する必要あり。
- 任期3年で次に移る人、同じ場所に居続ける人。

- 大学Faculty

- 年収の75%を大学から支給。残りはGrantかSummer sessionを教える。
 - この25%はバイアウトとは言わない。
 - 普通は、この25%の給与の出所でエフォート管理する。

- 助教授

- 独立なPI、自分のグループを運営。
- 4～6年でテニユア審査。多くは30台半ば～後半なのでストレスを溜める。

- 准教授・教授

米国でのキャリアパスについて

- 研究所Scientist
 - 100% 給料が出る。
 - 大学と同様、5年程度で審査→終身雇用
 - Success rateは大学より高い
- 研究所Scientist (Soft Money)
 - プロジェクト資金（大小あり）で雇われている。
 - 大規模プロジェクトだとnon-soft moneyとの境界は曖昧
 - NASA JPLやLBNL (not Physics Division)なども
 - 内部の競争的資金などが取りやすくなっていたりする事も多い
 - Matrix的な側面もある

米国でのキャリアパスについて

- 大学等のscientist（ソフトマネー）
 - 様々なタイプがある。
 - PIで競争的資金を使うタイプ：自分でGrantを取って給料を払う。（Facultyの25%の代わりに100%をGrantから）
 - 他のFacultyやPIについているタイプ（下記のProject scientistに近い）
 - DOE等でプロジェクトでの重要性が認知されていて安定してお金が下りてくる場合も。
 - 州や寄付金などから安定した資金で雇用されるタイプ：付属研究所等でもこういう場合もある。
 - 競争的資金がなくなった場合に、授業等を担当することで立場が安定化されている場合がある
 - やはりMatrix的なもの
- 大学や研究所のProject scientistやその他のタイトル
 - Postdocを長年続ける代わりに「昇進」する。
 - PIからすると単価が(大幅に)上がる。

米国でのキャリアパスについて

• その他思うところ

- Facultyは一生Pressureを与え続けられるスタイル
 - 一旦NSF, NIH, DOE等のfundingを受け始めると比較的更新し続けられるのだが、重複制限的に他のものが取れなくなり研究が硬直化するという話も。
- 米国は秋が大学院生・ポスドク・それ以上、全てのJob application seasonになっている。
 - 一度に出せるので応募者や推薦状を書く方にも効率が良い。
 - 雇われる側は、場合によっては複数のオファーの中から選べるのでよい。
- 大学院生・ポスドク → 民間への道が開けている
 - アカデミアに残るより2~3倍の給料が出るので、どちらが良いか自明ではない。
- テニュアに失敗して民間へ、のパターンも割とある